

舟戸ダム（合口ダム）

舟戸ダム（合口ダム）下流の庄川河川敷

舟戸ダム（合口ダム）周辺には、医王山累層に属する凝灰岩が広がっています。医王山累層は、医王山付近を火口とする火山活動によって噴出した火山碎屑物が堆積してできた地層です。この時代、舟戸ダム周辺は海の底でした。海底火山から噴出した火山灰や火山弾などが堆積してきたのがこの凝灰岩です。火山碎屑物が熱いうちに海中で化学的変化を受けると、「グリーントフ」と呼ばれる岩石に変化します。庄川河川敷には、このグリーントフやグリーントフが母岩と考えられる砂があります。激しかった海底火山活動を示す教材として使えるのではないのでしょうか。



舟戸ダム



角礫凝灰岩



グリーントフからできた緑色の砂



緑色の粘土鉱物の堆積



風化を受けた凝灰岩

金屋石（かなやいし）

凝灰岩の中で有名なのは、「大谷石」です。切り出しやすいため、塀や倉の壁材として利用されてきました。金屋地区の庄川河畔にある医王山累層の凝灰岩は、昭和40年代まで切り出され「金屋石」という名で流通していました。江戸時代には、金沢城へ水を引き込む「辰巳（たつみ）用水」や椎名道三が作った「十二貫野用水」の導水管として利用されました。また、家庭では柱の礎石や囲炉裏の周りの耐熱ポートとして使われていました。



大谷石（上二枚）と
金屋石（下二枚）



十二貫野用水導水管